

## 鏡

それに俺はどっさり壊れものをかかえこんでる（萩原朔太郎）

虚栄の華がぱっくり咲いて  
触れると吸い付くような花びらの中に  
暖かな季節へ向けて恥部が曝された  
彼奴は向こうでニヤニヤ笑っている

つまり俺は鏡に向かって歩いていたので  
真っ赤に俯いて、つまづきつまづき

身体中の筋<sup>さん</sup>を堅くこわばらせ

衆人の注目を一身に背負っている

意識が鏡から強烈にはね返ってくる  
即座に、しかも一分の狂いもなく  
何と微に入り細を穿っていることか  
しかもこの鏡は俺自ら据えたものよ

それに俺はどっさり壊れものをかかえこんでる

何時<sup>いつ</sup>ガラガラと崩れ落ちて粉々に割れ

ガチャンという悲鳴が神経を引き絞るかど  
はらはらしながら鏡を見て歩いている

誰も近寄るな、俺を見るな  
足に力が入りすぎて震えてくる  
手が凍り付いて動きが利かない  
首が回らない、目の端しか見えない

彼奴がよろけると俺もよろける  
どうしたんだ、これじゃ逆さまだ  
俺の魂は彼奴に奪われてしまったか  
では、俺はとうとう操られる側だ

意識が鏡から強烈にはね返ってくる  
これでは歩くことさえが踊りだ  
ああ、意識を超えた無意識が欲しい  
ああ、自我を超えた自己が欲しい

**(1982.5.19)**